

乳房はだれのものか

木村 朗子著

著者は、「物語のなかで女たちは、男の牛耳る歴史に抗つたのだ」とするテーゼのもと、近代の性の制度を覆す、別の性の姿を発掘しようと渾身の力を発揮している。始まりの問いは「乳房はだれのものか」である。

一夫多妻的な宮廷社会には、乳母の制度がある。子を産んだ母は正妻は授乳せず、〈生む性〉として出産を繰り返すことが求められる。乳母が授乳し、子育てをする。乳母は出産能力とは関係なく、たゞ主人の子を産もうが、〈生まれない性〉であることが求められる。授乳は生む身体と直結せず、母性とも単純には関わらないのだ。さらにややっこしいことに、乳母は育てた男児と性的な関係を結ぶこともあり、近代の性の制度とは異質な女たちの物語が紡ぎだされ続けたのである。乳房は乳母のものであった。それは母性も父



(新曜社・三、六〇〇円)

▼きむら・さえこ 津田塾大准教授。専門は日本古典文学や女性学など。著書に『恋する物語のホモセクシユアリティ』。

性も〈生まれない性〉である乳母を媒介にしなければ成立しなかつたということなのだ。

中世に入つて、宮廷物語や説話では神話的に表象された女帝が多く現れている。藤原道長は阿弥陀仏に導かれて極楽往生したのに對して、『我身にたゞる姫君』に描かれた女帝は兜率天往生を選んでいる。『法華經』卷五では、龍女が男に変身すること（变成男子）によって成仏できることを説き、女性の信仰を集めた。だが、仏教には、女の身は汚れていて、女には五つの障害があるため、成仏できないとする明確な差別がある。『法華經』卷八では、普賢菩薩が『法華經』を受持し読誦する者を兜率天に導くことを約束している。重要なことは、女帝をモデルとして、女の身のまま往生できるとする、女性の救いを描いていることだ。

この女帝は〈生まれない性〉として異性愛関係から断絶し、摂関政治の基盤とする婚姻などの性的関係を不要として、女だけの政治空間を形成し、善政を敷く。〈生む性〉の断絶を通じた女だけの領域、そこには女性差別を超えた女人救済をも構想された。著者はこうした「女たちのための壮大な物語」から、近代の硬直したジェンダー秩序を逆照するのである。